

## 検査測定でのひと工夫 —筋緊張検査—

関西医療大学保健医療学部 臨床理学療法学教室 鈴木俊明

筋緊張検査の具体的な方法に関しては、本学会編集の書籍である「臨床理学療法評価法 (アイベック)」に詳細に書かれているために割愛させていただく。  
今回、筋緊張検査のひと工夫として、以下の点についてお話しする。

### 1 筋緊張検査は筋の緊張だけを評価しているのではない。

筋緊張は、皮膚の上から筋の緊張自体を評価しているものである。評価者は、皮膚の上から圧を加えて、その跳ね返りで筋緊張が亢進、低下、もしくは正常域を決める。そのため、微かな圧を加えたときに皮膚の緊張を検査することができる。圧の量を少しずつ強めることで筋緊張が測定できる。健常者では皮膚の緊張と筋の緊張が同じであることが多いが、患者様では皮膚の緊張と筋緊張が異なることが多いために注意が必要である。

### 2 筋緊張検査は筋腹中央部での結果が全てを反映するのではない。

筋緊張検査は、筋腹中央部で行うことが多い。しかし、その結果で筋全体の筋緊張を反映するわけではない。今回は、腹直筋の部位による筋緊張の差異が体幹偏倚を決定しているパーキンソン病研究を紹介する。

### 3 筋緊張検査は各筋で評価しないと意味がない。

腹筋群、腰背筋群のように筋群で評価する場合があるが、できるだけ各筋で評価するようにしなければならない。その理由は、筋群を構成する各筋の働きが異なるからである。今回は、脊柱起立筋である最長筋、多裂筋、腸肋筋の作用の違いについて解説を加える。